

未来をひらく学びのために

村松 泰子

この4月は、日本の女性が初めて国政選挙で参政権を行使してから70年目にあたります。また、男女雇用機会均等法が施行されてから30年です。昨年は、「エンパワーメント」が合言葉だった第4回世界女性会議（北京会議）から20年の節目の年でした。戦後、日本の女性たちは時代を切りひらいてきましたが、世界経済フォーラムによるジェンダーギャップ指数（2015年）は、いまだ145カ国中101位にとどまります。徐々に前進はしてきたものの、そのスピードはあまりに遅い日本の状況です。女性たちが、課題意識をもち学び合い、さらなるエンパワーメントと社会的なコミットメントを果たしていくことが求められます。

公益財団法人日本女性学習財団は、今年3月で75周年を迎えました。全国の女性たちや女性団体からの寄付などをもとに、日本女子会館が芝公園の地に建てられ、この女子社会教育の中心施設を土台に、1941年3月に前身の財団が発足したのでした。財団は、その歴史を通じて、暮らしや社会のあり方に疑問をもち、変えていきたいと思う女性たちに主体的な学びの場と機会を提供してきました。2002年に財団名を日本女子社会教育会から日本女性学習財団に改め、学習の重視を明確にしました。

1952年に『女性教養』として創刊された財団の月刊誌も、日本女性学習財団への改称とともに、月刊『We learn』となり、創刊以来、先月号で通算750号を数えました。引き続き男女共同参画社会に向け、未来をひらく学びのための情報誌として、工夫しながら発信していきます。

財団は、これまでの歴史を踏まえ、未来を見据え、今後も民間の全国的拠点として、その目的を継続的に果たしていきたいと思います。そのための基盤を強化しつつ、財団につながる女性、そして男性のみなさまとともに、若い世代にも参画してもらい、男女共同参画社会の形成に向けた学習を支援するための情報提供、人財育成、人と社会をつなぐネットワークづくりを柱に事業を展開していきます。



PROFILE

むらまつやすこ：公益財団法人日本女性学習財団理事長。NHK放送文化研究所研究員、東京学芸大学教授・理事・学長を経て、2014年6月より現職。専門は社会学、とくにメディアとジェンダー、教育とジェンダー。近年の共著書に『高校の「女性」校長が少ないのはなぜか』（学文社、2011）、『テレビ報道職のワーク・ライフ・アンバランス』（大月書店、2013）、『実践ガイドブック 大学における男女共同参画の推進』（悠光堂、2015）ほか。